（本號八面）　（明治三十年五月一日　逓信省認可）　明治二十八年八月廿四日　第四千三百六十七號　（定價金二錢五厘）

時事新報

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり　時事新報には毎號詳細なる商況物價の報告あり

時事新報

電氣鐵道の哩數に就て

東京に電氣鐵道を敷設するの必要は我輩の毎度時事新報に主張したる所にして近來は此問題も漸く世間の注意を惹起すに至り隨て我輩の說に贊成の人も日に益す增加するの模樣なれば此勢を以てするときは僅分ひ或部分には尙ほ多少の反對を免れずとするも愈よ日本の首府に電車の運轉を見るの日は必ず近きに在らんと想像して間違なかる可し就ては此新事業の實施に先ち我輩が當事者に向て特に勸告せんと欲する所のものは他にあらず鐵道の哩數を成丈け多くして普く市中の各處に到達せしむるは勿論、場合に依りては遠く市外にまでも延長せしめて以て市の中央と近郊地方との交通往來を自由ならしむるの一事なり或は電鐵事業の由來性質を知らざる者は唯これを知らざるが故に漫に疑惑を抱き俗に所謂「大事を取る」の心よりして先づ市の中央繁華の小部分のみに敷設し兎に角に收入を多くして支出を少なくするみとを專一としいよ〳〵利益の確なるを見定めたる上、徐々に他の場處に延長するを以て得策なりと思ふ人もなきに非ざるが如し不知案内の事柄に當て果斷の勇氣を失ふは人情の常にして深く怪しむに足らざれども若しも今日電氣鐵道を計畫しつゝある人々にして斯る淋しき考を以て事を行はんとする者ならんには我輩は東京市全體の利害に訴へて斷然反對せざるを得ず抑も電氣鐵道なるものは西洋文明最近の產物にして其運轉の輕妙簡單なるみとは遙に馬車鐵道の上に在りて然も其速力の高くして輸送量の大なる點に於ては汽車鐵道にても或は一步を讓る程の次第なれば今後文明世界の運輸器械として馬車が到底汽車と競爭する能はざるは分り切つたる事柄にして目下の有樣より想像するときは汽車と雖も重貨物の運搬を除くの外一切の營業を電車の爲めに奪ひ去らるゝに至るも遠し數年の後を俟たざる可し其便利にして有力なるは最早や一點の疑なくして諸外國の實驗明々白々なれば今日みれを我中央の帝都に利用して充分に其効能を現はさしめんとするには何はさて置き線路の哩數を多くして車輛運動の區域を廣くせざる可らず即ち市中の重なる街衢は漏なく之を包括したる其上に市外近郊の地にも出來る丈け線路を敷延して以て市と近郊との交通を自由にしてみを始めて電車の利益を人民に悟らしむるを得るみとなれ隆市中繁華の場處を撰んで僅々數哩の線路を造りたるのみにては恰も狹隘なる渡船場に蒸汽船を使用し舊來に往來する人力車を用ふるものに等しく損角の文明利器も其便利なる點を實際に現はすの期會なかる可し聞く所に據れば米國なせにては近來各都會にて電氣鐵道の發展日に益す盛なるより今まで邊鄙不便なるの故を以て碌々買人もなかりし地面が俄に異常の景氣を現はし二倍三倍若しくは十數倍の高價に騰貴したるの實例甚だ多しと云ふ地價の騰貴は即ち電氣鐵道の敷設に由て公衆一般の受得する利益の標準として見る可きものにして其多寡は即ち主として電車路の長短に由て定まるものにみそれば愈よ東京に電氣鐵道を許可するみとゝ決定したる曉には市は必ず計畫者に向て經濟の許す限り線路哩數を多くせんみとを要求せざる可らず又計畫者に於ても一時の利益配當のみに心を寄するみとなく長く市民全體の利害を考へて所謂自利々他の義は忘る可らず況や西洋諸國の都會にして二三百哩乃至千數百哩の線路を有するものの敢て珍らしからざる其際に我國の首府に限りて僅かに十哩以て數ふる哩數に非されば收支相償はずとの理由なきに於てをや我輩をして云はしむれば東京市に電氣鐵道を敷設する以上は其哩數は百よりも寧ろ千に近き數ならざる可らずと斷言する者なり

雜報

○北京所見

八月十一日發　幡派員　松尾久男

氣候

北京の地たる冬は沍寒凜烈毛皮を重ねずんば堪へ難からず夏は炎威金を爍かし日中に外出せんと思も寄らずとは余が東京にあるの日屢々耳にしたる所なりき金の東京を發したるは六月五日にして將に暑に向はんとするの時なりしを以て心窃かに恐怖を抱きたりし然るに北京に入るに及ぶも左程暑さを感ぜず土用も來り三伏の時候となれども暑さは却て東京にも及ばざるが如く寒暖計の九十度に達したる事は未だ一二回に過ぎず普通八十五六度を昇降し殊に朝夕は單衣一枚にては涼氣を感ずる位なり同行の士相會すれば「今年は妙な處で避暑を遣つた」とは常に交ふるの言葉なり

降雨期

北支那地方には一定の降雨期あり舊曆七月に至れば一箇月の間は殆んど雨の絶間なく此の間は所謂三伏の時候にして尤も暑氣の甚だしき時なるも之が爲めに暑氣を冷却して大に淺き易しと云ふ今年は閏年なるを以て未だ七月には達せざるも最早降雨期に近づきしもの〳〵如く晴雨相半し雨天の時は大に冷氣を感ず去れども北京の市街に一箇月も雨降れば道路は忽然水田の如く到底外出すべからず支那人は此期間は必要の外外出せずと云ふ

氷

北京は道がに寒氣甚だしきが故に冬期に至れば自河氷結し舊曆十一月より三月初旬までは太沽の方面へ出づる事を得ざるなり此期間に於て自河の氷を運び來りて之を地下六七尺の處に層々相重ね其上に又土を掩ひ蓄へて以て夏時の用に供す是故に天津北京に於ては氷の廉なる事甚だしく中人以上は必ず氷室を作り毎日氷を運ばしめ以て調房の用に供するも其費用一箇月五圓に上らずと云ふ左れども此氷は濁流の氷結したるものなるが故に物の腐敗を防ぎ又は之を冷却するの用に供するのみにして食ふべからず然れども此暑の候に於て而かも海辺では七八十里を距たり運輸の最も不便なる北京に於て海魚を食し得るは蓋し此氷の賜なり

菓物

支那は最も菓物に富む殊に北京は菓物を以て有名なり桃と云ひ林檎と云ひ李と云ひ或は西瓜と云ひ瓜と云ひ之を日本の者に比すれば其形大なるのみならず味亦甚だ佳なり殊に西瓜は數種ありて白きあり黃なるあり赤きあり白きものは三白と稱し最も美味なりとす又聚あり其大さ桃の如く多く砂糖漬となして能く久しきに堪ふると云ふ

家禽と家畜

家鴨と雞とは盛んに之を養ふもの〳〵如し試に城外に出づれば城の周圍を繞れる堀には白家鴨の數百群を爲して浮遊するを見る其他豚の如き綿羊の如き將た馬の如きは之を養ふ事少からず豚は汚穢なる道路に打臥して人の通行も車の往來も一切構はず汚穢なる道路に更に一層の汚穢を加ふるもの〳〵如く綿羊の群は城外廣き所各所に點々たるを見る要するに支那人は肉食人民だけに家禽、家畜の飼養は甚だ盛んなれども城内には餘り之を見受けず多く城外に於てす

蟲類

支那は又害蟲に富むの國なり臭蟲と云ひ白蛉と云ひ將た蝿と云ひ皆恐るべし臭蟲は其大さ米粒の如く色黑くして蓋は木の破目又は床下に隱れ夜に入れば出でゝ人を襲ふ其運動敏捷にして容易に發見すべからず此蟲に螫さるゝ時は人に依り腫化し四五日間は治せざる事あり支那地方何れに至るも生息せざるなく少しく不潔の處に至れば必ず此蟲に襲はる此蟲又四時の別なく生存するが故に最も恐るべし嘗て大坂兵營に發生し寢具、建物を殘拂ふたりと云ふ俗に南京蟲と稱するものの是れなり白蛉は白羽を有する小蟲にして蚊の如く其形小なるを以て容易に見るべからず此蟲又蚊よりも害を及ぼす事甚だしく一度螫さるゝ時は非常に腫れ上り痒黑き斑點を殘すべし蝿に至りては其害更に甚だしく四五日間は苦痛に堪へずと云ふ其形百足の如く大さ二寸より三寸に及び時に或は靴の中に潛伏する事ありと云ふ兎に角蟲に富むの國なり

葬儀

葬儀は支那に於て四大禮の一にして其儀式甚だ厳なるが如し併し赤き着物やら青き着物やら種々樣々の色を用ひ棺を蓋ふにも亦奇麗なる錦繻を用ひ我國の素菰を用ふるを違ひ我々の目より之を見れば恰も御祭の屋臺の如し通常乞食を驅り集めて龍の首やら鳳やら種々樣々の物を持たせて前驅を二列となし其次には僧侶氣なる音樂を奏するものあり喪主次に素衣白帽にて哭して從ひ次は棺なり前驅は乞食なるが故に行々立喰を爲し後に輔哭して從ふ者ある抔其奇々怪々なる之をしも厳格の儀式と云ふべきか支那の虛禮に走る往々此類なり

衣食住

屬々報ぜしが如く支那人は貧富の懸隔甚だしきはなく從て其衣食住に至ても非常なる差異を見るなり其上流の士に至りては錦繻を衣、玉食に飽き高樓に美妾を蓄ふるも其下流の輩に至りては斜傾き柱折れたる入墨敷位の中に數口の家内が土間に屬掛樓のものを設き僅に生息するものあり是等の輩に至りては街頭に出でゝ小寨にて製したる饅頭樣のものを買ひ或は一錢飯屋に飛込みて僅に其生活を維持するものなり饅頭は支那流儀にて腰の下に[illegible]條々にて茶碗車に乘りて謹官吏あり是れ車の流の輩に至りたずと云ふ亦人の特質とする物にあらざる度低しと云ふに病氣に罹り

古衣

支那人の商品するは我國に於なりしが其一衣物の古手やは驚けり彼等び外國人の入し掛け來り其試み直切り倒入して其五月の如く懸直を云し中には往々見かゝるものあるならんと分あるならば其眞情

琉球

琉球廢とは正陽書肆を以て充に多くの書物とりは到底其骨董たび中に入れば大に見るべきもかし其價數百金支那の上流社會し得べし去れども又其高價なるに及ぜざるの故かも那の書生は餘程べし是れ事ろ支

○英國東洋艦隊

艦リーンダーに命じたり同艦は入百八十五年に五千なりと其後巡洋艦ビーク

○警長交代

師滿期に附き千富士日豊と管見の認可を得たる

○增收の總源の得失を論ず

に思して二千高圓而して考慮を要す